

2000年1月10日

とおるとりえこのハーバード便り

第 四 号

発行人：野村 亨、理英子

住所：# 2, 472 Broadway, Cambridge,
MA. 02138, U.S.A.

電話 / F A X : 1-617-864-1091
email:fwht6002@mb.infoweb.ne.jp
nomura@sfc.keio.ac.jp

謹 賀 新 年

〈メキシコ旅行〉

みなさんお正月はどのように過ごされましたでしょうか。

12月17日に理英子の英語学校がクリスマス休暇に入ったので、一緒にメキシコを旅行してきました。以下はその旅行の報告です。なお今回は電子メールをお使いの方には試しに電子メール版でもお送りしています。

12月18日の早朝、まだ暗いうちに家を出て空港に向かいました。前夜の天気予報では積雪6インチが予想されていたので、早めに出ることにしたのですが、幸い雪は降りませんでした。ボストンのローガン空港ではクリスマス休暇に中南米諸国へ帰省する学生などで混雑していました。ここではスペイン語が飛び交い、はやくもラテンアメリカの雰囲気漂っていました。コンチネタル航空便でボストンを発ち、3時間あまりの飛行の後、テキサス州のヒューストン空港に到着しました。テキサスの大平原の真ん中に着陸するのは爽快な気分でした。テキサスとボストンとでは2時間の時差がありました。ここで米国出国の手続きをしてからまた飛行機を乗り継いで2時間弱の飛行の後、カリブ海に面したリゾート地カンクンの空港に到着しました。国内線の方が国際線より時間がかかることにアメリカの広大さを感じました。ここはユカタン半島の先端近くにあり、飛行機の機窓から見える真っ青なトルコブルーの海と白い海岸が印象的でした。陸地はほとんど沼地であり人家は見えませんでした。

〈カンクン〉

空港へ降りると強い南国の日差しが照りつけ、東南アジアのどこかへ着いたような感じでとても懐かしく感じました。浅黒い肌の小柄なメキシコ人たちは陽気で、フィリピンかタイとよく似た感じを受けました。メキシコの通貨はペソといい、1ペソが約10円ですか

ら換算しやすいのですが、表示が米ドルとよく似た\$なので、初めはちょっととまどいました。考えてみれば現在のドルという名称は元来メキシコでスペインが発行していた銀貨「スペインドル」に由来しているので、こちらのほうがむしろ本家なのです。

カンクンはほんの20年ほど前はヤシのプランテーションがあるだけの寂しい場所だったそうですが、現在ではメキシコ有数の観光地になっています。もちろん最大の客はアメリカ人です。カンクンのホテル街は細長く延びた砂州の上にあります。外海はカリブ海でかなり波が荒く、波と戯れる位が精一杯です。理英子



メキシコ、カンクンで泊まったホテル・ウェスティン・レギーナの朝食。窓の外は真っ青なカリブ海だ。1999年12月21日

は新しい靴を買って履いたまま海に入ったところほんの数分で両方とも波にさらわれてしまいました。また反対側は広大なラグーン（潟湖）になっていて、こちらでは水上スキーやマングローブの森の間をモーターボートで走ったり、と水上スポーツが楽しめます。我々の泊まったウェスティン・レギーナ・ホテルは外海に面していて、美しい海岸が望めますが、やはり波が荒く、プールで泳ぎました。到着後すぐに町の中心で開かれる民族舞踊のディナーショーに出掛けました。ここのホテル街は一本道で、バスが頻繁に来るので出歩くのはとても便利です。料金は一回4、5ペソ（約45円）でした。

大味で分量だけがやたらに多いアメリカ料理にそろそろ食傷して来た我々には、メキシコ料理はトウガラシなどのスパイスがとてもよく効いていて、とてもおいしく感じました。理英子は「メキシコ料理というのはいわばアメリカ大陸のタイ料理ね」と言っています。主食はトウモロコシの粉で作ったタコスやトルティーリヤなどです。またエンドウ豆のような豆のスープもおいしいです。どこへ行ってもトウガラシの酢漬け「ハラペーニョ」が



イスラ・ムヘーレスの街角にて。原色の建物がいかにもラテン・アメリカ的である。1999年12月20日

ちょうど漬物のようにおいてあり、辛いもの好きの我々はたっぷり入れて食べました。

民族舞踊のショーもなかなかレベルが高く、とくに歌のうまいのには感心しました。どれもこれも変化に乏しく、ただやたらに楽器がうるさく、蛮声を張り上げているだけのようなロックンロールなど、アメリカの音楽に比べると、メキシコの音楽の方がはるかに芸術的で質が高いと感じました。

とくに亨は子供のころからマリアッチの陽気な音色が大好きだったので、本場の演奏を聞

けて感激しました。理英子はダンサーに誘われて舞台上がり、一緒に踊りました。

翌日は朝から双胴型の大型ヨットに乗って沖合にある島イスラ・ムヘーレス（女達の島）へ行きました。島の沖には世界で2番目に大きいサンゴ礁があり、そこでシュノーケリングをしました。ボートから海の中へ入ると青い海のなかをたくさんの魚たちが近寄って来ます。我々が泳いで行くと黄色い尾の魚たちが大群で一緒に回遊していました。またカジキマグロやエイなども見えました。その様は幻想的ですが素晴らしいものでした。

《マヤ遺跡》

20日には一日ツアーに参加して古代マヤの都市遺跡チチェン・イツァに観光に行きました。ジャングルの中を一直線に走るハイウェイを3時間あまり走ると遺跡の入口に着きました。ここは六世紀頃から栄えた古典マヤ文明の都市遺跡ですが、いったん滅び、また10世紀には復活してマヤ・トルテカ文明が栄えましたが、13世紀には滅びてしまい、16世紀にスペイン人が征服した当時はずでなれば廃墟になっていたそうです。遺跡公園の中に入って行くと森の中の広場に巨大な階段ピラミッドが立っている姿がまず目に入って来ました。その姿はとても幻想的で白昼夢を見ているような感じがしました。急な階段を登ると見渡すかぎり地平線まで



ユカタン半島、マヤの古代遺跡チチェン・イツァのピラミッドの前で、1999年12月21日

ジャングルが広がり、素晴らしい光景でした。また広い競技場があり、古代にはここで占いのためのボール競技が行われ、勝敗で占いがされたとのこと。勝ったチームの選手がいけにえとして殺されたとの伝説もあります。

また別の神殿では雨の神チャックの姿がありましたが、この神像の胸の上にいけにえの心臓が捧げられたそうです。マヤ文明は独特の象形文字をもっていますが、一部しか解読できていません。またこの文明は天文学が異常に発達した文明で、そのための天文台も残



チチェン・イツァ、古代マヤのピラミッド頂上から雨の神の神殿を俯瞰する、1999年12月21日

っています。どうしてそれほど天文観測にこだわるのか、またどうしてそれほどいけにえにこだわるのか、不思議な気がしました。反面この文明には「車」というものがなかったのも不思議です。彫刻のモチーフにもやたらに髑髏などの模様があり、この文明は「死」というものに異常な興味を持っていたという印象を得ました。亨は中学時代からマヤやアステカ文明に興味があり、マヤ象形文字の本を読んだりしていたので、現地を見ることができ、とても感激しました。帰路にはバジャドリ（Valladolid）と

いう町に立ち寄りしました。ここはスペイン征服軍によって1584年に建てられた町です。町の名前そのものもスペイン風ですが、町のたたずまいもまったくスペインかポルトガルの田舎町のような感じで、古代遺跡との落差を感じました。また途中セノーテという泉を見学しました。ユカタン半島は石灰岩質で川がほとんどないかわりに、地下水が豊富で、ところどころにセノーテという縦穴のような泉があります。古代マヤの時代には聖地になっていたそうです。なかへ降りて行くと、円形のプールのようなところに深い緑色の水が湛えられています。見上げると上に円形の空が見え、とても神秘的な感じでした。

21日には潜水艦に乗ってまた海底を見ました。ボートでカンクンの沖合に行ってから黄色い潜水艦に乗り換えます。「潜水艦」といっても観光用なのでまったく水の中へ沈むわけではありませんが、グラスボートと違って少しだけ海の中へ沈むので、水平に魚が泳いでいるのが見えます。

《メキシコシティー》

22日にはカンクンを発って首都メキシコシティーに向かいました。AVIACSA という国内線の飛行機でしたが、気圧調整装置の故障で2時間半あまり遅れて飛び立ち、夜7時半頃ようやくメキシコシティーに着きました。飛行機の出発を待っている間、暇つぶしにナチョスというおつまみを食べていたら、おなかが一杯になってしまいました。

メキシコシティーは標高2400メートルあまりの高原にあるので、慣れるまでちょっと息苦しさを感じました。メキシコオリンピックの時、外国選手は体調の調節にさぞ大変だっただろうと思います。ホテルは空港の真ん前にあるマリOTTホテルだったのでとても便利でした。また空港の構内に地下鉄の駅があります。メキシコシティーには7～8系統もの地下鉄が走っているので、これを使い続ければ市内のどこへでも行けてとても便利です。また料金は1、5ペソ(約15円)でどこまでも行けます。地下鉄の車内に物乞いや物売りが来るのはソウルの地下鉄を思い出させてくれました。乗客の顔を見ていると、まったく白人の顔があるかと思うと、日本の田舎で見かけるおじさんのよ



メキシコ、テオティワカン、月のピラミッド頂上にて、背後に太陽のピラミッドが遠望できる。
1999年12月23日

うな顔もあり、ここが混血の社会であることを思い起こさせてくれました。

23日は早朝にホテルを出て、地下鉄で北部バスターミナルへ行き、ここからバスで1時間あまりのところにある古代遺跡テオティワカンへ行きました。バスターミナルはクリスマスで地方へ帰省する人々で混雑していましたが、広いターミナルの真ん中に聖母マリアの像が飾ってあり、ちょうど日本のお地藏様のように通りすがりの人々がお祈りして行く姿はいかにもカトリック国らしい印象を与えてくれました。

メキシコシティの郊外は乾燥地帯で、全体に白っぽく、埃っぽい印象を与えます。また高速道路のわきにはサボテンが生えていました。テオティワカンの遺跡は紀元前2世紀頃から建設が始まり、紀元4～7世紀に栄えた古代都市の遺跡で、最盛期には20万人にも登る人口を擁していたと言われていますが、8世紀に突如滅びてしまったということです。この遺跡を作った民族がどういう人々であったかはまだ不明の点が多いとのこと。ここは密林の中にあるチチェン・イツァと違い、半砂漠地帯のまんなかに巨大な月と太陽のピラミッドがそびえ、それを挟んで「死者の道」と呼ばれる広い参道が伸びています。現在あたりには灌木すらなく、草とサボテンしか生えていませんが、古代には肥沃な土地であったのでしょう。地下宮殿には鮮やかな古代の色彩が残っていました。ここでもいけにえの儀式が行われていたようです。月のピラミッドは高さ65メートル、太陽のピラミッドは高さ46メートルもあり、下から見上げると見る者を圧倒します。我々は両方ともに登って見ましたが、頂上からの風景は密林ではなく、赤茶けた半砂漠であたかも月世界の光景のように見えました。ピラミッドの石組みはとても精巧に出来ていて、なんの機械もなかった古代にどうやってこんなに壮大な建築物を作ったのが、本当に不思議です。またこんなにすばらしい建築技術をもった人々がなぜ突然消えてしまったのか、不思議な感じがしてなりません。

たっぷり遺跡を堪能した後、またバスでメキシコシティ市内に戻り、チャプルテペック公園のなかにある国立人類学博物館を見学しました。夕方になったので駆け足の見学でしたが、有名なアステカ文明の残した「暦の石」をはじめ、古代メキシコの各文化の遺物を堪能しました。ことに目を引くのは古代アステカ文明の遺物でしたが、なにより驚いたのは、現在のメキシコシティのある場所がかつてアステカ帝国の首都テノチティランがあった場所ですが、この古代都市は広大な湖の真ん中に築かれた人工島の上にあったということです。復元模型を見ると、まさに湖に浮かぶ巨大都市で、これほどの文明を持つ国家が数百人たらずの侵入スペイン人にやすやすと征服されてしま



メキシコシティ、中央大聖堂前にて、
1999年12月24日

ったのはこれまた不思議なことです。

24日は朝また地下鉄で市内中心のソカロとい

う広場へ行きました。ここでは中央カテドラル(カトリック教会) 国立宮殿などを見ました。おりからクリスマスイブで、教会にはたくさんの信者たちが参詣に訪れていました。広場のかたわらにあるテンプロ・マヨールという遺跡にはことに興味を引かれました。ここは古代アステカ時代の神殿遺跡とスペイン植民地時代の教会跡が重なって発掘されている場所です。古代の鮮やかな色彩が残るテラコッタの壁や床に重なるように、教会建築の破片が出土しています。回りは普通の市街地で師走の買い物客が往来しており、囲いの中

の遺跡と対照をなしていました。16世紀にこの地を征服したスペイン人の残虐行為や文化破壊はもちろんいかなる理由であっても許せない蛮行ですが、一方でいけにえのような非人道的な行為が宗教の名のもとに現在でも行われていたとしたら、これもまた許せないと思います。こう考えるとスペインの征服は果たしてメキシコにとってよかったのか、悪かったのか、複雑な心境にならざるを得ません。

昼になったので大急ぎで地下鉄に乗って空港に戻って、午後の便でふたたびヒューストン経由、ボストンに戻って来ました。

中南米はふたりとも初めての訪問でしたが、全体にとってもいい印象を得ました。たしかにメキシコはアメリカに比べると貧しい国ですが、人々は陽気でとても親切でした。我々はスペイン語は片言しか話せませんが、発音が日本人にとってとてもやさしいのですぐ聞き取れるし、発音もしやすい言語です。また英語やフランス語と共通の語彙がたくさんあるので掲示なども類推でき、ほとんど不自由なことはありませんでした。ケンブリッジの自宅でメキシコ旅行の写真を見ながら「また他の中南米諸国へ行ってみたいね」と話しています。

Y2K問題は無事終わって一安心ですが、当分寒い日々が続くことでしょう。どうか皆様も風邪など引かぬよう、お元気でお過ごし下さい。

野村 亨、理英子